

44.12.17

# 明大共闘

明治大学全学共斗会議

情宣局発行

定価 30 円

12 / 17 全学政治

## 集会の意義

全学共斗会議

横谷 優一

△序▽

七〇年代帝国主義打倒闘争に向かって序章を権力との激しい攻防のうちに鮮明に書き記した全ての学友諸君

一〇／一一月を頂点とする日本階級闘争の現状のうちに全てが明白となり我々の前に開かれている。我々が何を本来の任務とすべきかが現実のほうから歩みによりて明らかになつたのだ。現実の我々への接近は言うまでもなく、我々の主体的な現実への不斷の働きかけによるものである。歴史は巨視的に観察することによって、いつも人間に正当に報いるものであることがわかる。少なくともこの序章のうちに我々は人間解放に至る全過程の問題を書き記してきている。一〇／八からの実力闘争の深化の過程は我々が血でがなつた貴重な教訓に教きつめられている。我々はここからこそ学び、ここからこそ前に進むことができるのだ。何よりも戦後二、三の数年の間にわざりの日本社会的活動の動きから

が我々をここまで成長させたのだ。

### ① 全国学園闘争は何を明らかにしたのか。

明らかにしたのか。

全学共斗会議

横谷 優一

我々はこの一年間の全国の学友諸君の英雄的な闘いを過大に評価しようとするのではない。しかし一〇／八以降の実力闘争、反戦闘争の質を受けつき、深化させ发展させるのにこれ以上の形態があつたであろうか。大学の帝国主義的再編に対決し広範な安保・沖縄闘争との結合を指し示し、反帝闘争の拡大を政治過程に登場する部分のみならず、戦後の思想、文化、科学あらゆる領域への根底的な批判の展開として実現し、日本階級闘争の最良の質を示したものである。そこでは革命の問題が語られ、しかも人間の解放を根底としているが故にあらゆる擬制をあくまでできたし、断罪することができたり、そこではロシア・マルクス主義の憑しき体質を近代世界総体の超克として主張していく方向性を明らかにし、着々とその準備が進められている。そこでは権力の庇護の下に延命しようとする学者先生を尻目に、世界の変貌を自から方向づけようとする生命力が息づいているのだ。

「暴力」の正当な復讐は再度「思想」に力を与えつある。侵略と抑圧をこととし、擬制の平和を弄び、人類史を頽廢へ導く者達は葬られなければならない。何をもたらすか。それが何をもたらすかは

価値観の転換を指し示してきた。我々があらゆる擬制への挑発者であり、分裂主義者であり、そして暴力主義者であることによって、はじめてこれが可能であったと言わざるを得ない。

我々の闘いはある意味で感性的反逆であつたろうし、即時的反発であつたろうし、スケジュール化された延々持たないものであつたろう。

しかし我々はそのことを恐れはしなかつた。権力者の横暴を断罪し、蔓延する怯懦の鎖につながれた者達を告発するのに我々は何よりも大胆でなければならなかつた。しかし我々の大膽さが決意性にのみ依つたものではないことは明らかであろう。六〇年代初頭からの学園に対する権力の介入、大学当局のそれへの迎合、そして大学自治擁護の一貫した学生の闘いがそこには裏打ちされていたのだ、しかも我々は歴史の単純な延長の上を歩きはしなかつた。つまりもはや「自治擁護」などを掲げはしなかつたことである。六〇年代の学園闘争を通じて我々は権力の大学への介入が、今日の日本資本主義の構造的な転換によつてくるものであることを学んできたし、「大学を守ればよい」ということで解決がありうることでは大學をさえ守ることはできぬであろうことを知つていたのである。我々の「リーダー」は「半山

市國主義的再編精神」であり、市國

主義の侵略と抑圧に対決するあらゆる戦闘的な闘いと結合し「七〇年安保粉碎」「沖縄斗争勝利」の闘いを前進させることであった。我々はその意味で我々自身が全てに感性的であり即時的であつたなどとは思っていない。我々に対して全て感性的であり、論理を持たず、手前勝手なことをしか言わないと説教する人達は、あり耶と我々のあまりに激しい闘いに仰天し論理を忘れてしまつたのかもしれない。未だに我々とは話をしたがらない明大当局者のあれやこれやの弁解が論理的な貫性に欠け、表面的な反権力がますます権力と齋藤し始めた自己保身へとおちこんでしまうのもそのためであろう。

ともあれ我々のスローガンは正しかつた。そのことは現在の明大の現実がはつきりと経えてくれている。「大学の帝国主義再編粉碎」「大学立法粉碎」を基軸とした全国学園闘争は、早大・明治・中央と個別的にのみ聞われた学園闘争を、全国の大学における普遍的課題として設定することに成功してきた。また現代社会における大学の実体を明確にし教育面では高校生に反乱を拡大し、そして職場労働者には山猫ストを実現させてきた。我々が指し示してきた通り反帝国主義闘争とのより一層の結合、またそれの強化なくして、従つて反権力を権力打倒へ組織することなくして、もはや大学は決して大學たりうることはないであろう。

主義の侵略と抑圧に対決するあらゆる戦闘的な闘いと結合し「七〇年安保粉碎」「沖縄斗争勝利」の闘いを前進させることであった。我々はその意味で我々自身が全てに感性的であり即時的であつたなどとは思っていない。我々に対して全て感性的であり、論理を持たず、手前勝手なことをしか言わないと説教する人達は、あり耶と我々のあまりに激しい闘いに仰天し論理を忘れてしまつたのかもしれない。未だに我々とは話をしたがらない明大当局者のあれやこれやの弁解が論理的な貫性に欠け、表面的な反権力がますます権力と齋藤し始めた自己保身へとおちこんでしまうのもそのためであろう。

ともあれ我々のスローガンは正しかつた。そのことは現在の明大の現実がはつきりと経えてくれている。「大学の帝国主義再編粉碎」「大学立法粉碎」を基軸とした全国学園闘争は、早大・明治・中央と個別的にのみ聞われた学園闘争を、全国の大学における普遍的課題として設定することに成功してきた。また現代社会における大学の実体を明確にし教育面では高校生に反乱を拡大し、そして職場労働者には山猫ストを実現させてきた。我々が指し示してきた通り反帝国主義闘争とのより一層の結合、またそれの強化なくして、従つて反権力を権力打倒へ組織することなくして、もはや大学は決して大學たりうることはないであろう。

早勉明治大学も実業学校への転身を考えるべきであろう。

## (2) 学園斗争の展望

我々の根底的な問い合わせは更に執拗に行なわれていくだろう。しかも七〇年代の姿が次第に明確になってきている現在そのことの意味は増々重要性を帯びてこざるを得ない。

日本とそして世界にとっての七〇年代とは何かということを抜きにして事が行われていくべきではないし、また避けられることではない。我々ははつきりと示すことができる。七〇年代は少なくとも東南アジアにおいて日本はアメリカにとつてかわるであろうということである。兵器国産化から核武装へ至るであろう第四次防衛まさにそのためであり、国内矛盾の激化、対外膨張、解放闘争の激発、国内世論の二極化ははつきりとみえているのだ。しかしこのことは我々だけにわかっていることはない。政府・自民党・財界の政策は七〇年代の予測に立つたものであることは今指摘するまでもない。しかし

このことは以前から言つても、思想内容からも、逮捕者の数を見ても、これまでのいかなる斗いをも遙かに超えた新たな階級斗争への転換点を画したのである。

この二昼夜に亘る斗いは、これまでの階級配置に根底的動搖を与えたばかりでなく、所謂「新左翼」と呼ばれる革命派内の配置図をも完全に塗り変えたのである。我々はいまこれら我々の、そして多くの労働者・学生の創り出した階級的流動を分析しつつ、新たに迎えるべき、七〇年代プロレタリア権力創造に向けた階級斗争の方向への討論を展開してみたい。とりわけこの一月斗争を頂点とした二年間の激斗を牽引し抜いた革命的学生運動が、この「革命の七〇年代」に果すべき役割の明確化を第一の課題として解明して行きた

にかけられたと言つて過言ではない。

大学当局は「全共斗は大学の枠を飛びこえ政治斗争化してしまっている

## 70年70年代

### 闘争にむけて

#### 学園と職場の連帶を

全二部共斗会議 議長 本間 崑豪

一月一六・一七日の斗いは、学生革命派が六七年一〇月八日羽田における激斗から二年間に亘って培つて来た論理と組織の全てを賭けて戦い抜かれたものであった。この二日間の休戦なく続けられた斗いは、その規模から言つても、思想内容からも、逮捕者の数を見ても、これまでのいかなる斗いをも遙かに超えた新たな階級斗争への転換点を画したのである。

この二昼夜に亘る斗いは、これまでの階級配置に根底的動搖を与えたばかりでなく、所謂「新左翼」と呼ばれる革命派内の配置図をも完全に塗り変えたのである。我々はいまこれら我々の、そして多くの労働者・学生の創り出した階級的流動を分析しつつ、新たに迎えるべき、七〇年代プロレタリア権力創造に向けた階級斗争の方向への討論を展開してみたい。とりわけこの一月斗争を頂点とした二年間の激斗を牽引し抜いた革命的学生運動が、この「革命の七〇年代」に果すべき役割の明確化を第一の課題として解明して行きた

能である」と語つてゐる。情勢認識は正しい。しかしここが決定的な分歧点であることがわかつていい。敵の攻撃が総体に対してかけられてきている時、我々が総体的な視野で闘い抜かずしていつたい何が可能であるというか。学園における斗争の質を更に強化し、反帝國主義斗争との連帶の可能性を追求し、永続的に闘い抜くことなくして勝利はあり得ない。大学当局が漫画的な改革案を描いてみせ、政治主義的な事態の切り抜け策に頭を痛めている。そこまで見通した我々には学園の枠の中で夢を描いていることなどもはやできはしない。教授会が唯一自己保身の手振りとしてきた教学権は既に権力に売り渡されている。君に再度、勇気と力を与えるものとなる。我々はそれだけの力を有している。全ての学友の密集した討論によつて明大斗争の更なる前進をかちとろう。

この二昼夜に亘る斗いは、これまでの階級配置に根底的動搖を与えたばかりでなく、所謂「新左翼」と呼ばれる革命派内の配置図をも完全に塗り変えたのである。我々はいまこれら我々の、そして多くの労働者・学生の創り出した階級的流動を分析しつつ、新たに迎えるべき、七〇年代プロレタリア権力創造に向けた階級斗争の方向への討論を展開してみたい。とりわけこの一月斗争を頂点とした二年間の激斗を牽引し抜いた革命的学生運動が、この「革命の七〇年代」に果すべき役割の明確化を第一の課題として解明して行きた

い。

一昨年一〇月八日の羽田における斗いは、それ自身、斗争主体が、学生だけであったことと、運動事態が未成熟であるという限界を持つつも、戦後の日本（あるいは世界の先進国）階級斗争の中において提起されることのなかつた階級的武装の問題を大胆に、大衆的に提起して行く斗争であった。

同時に、この斗いは、戦後革命の一の継承を行っていたベトナム革命斗争との連帯を求めた意味で、更にプロレタリア国際主義の復権を自ら創出して行つた。

この階級的武装と、プロレタリア国際主義の運動は決して一般的な内容として語られるのではなく、この斗争の中にこそ、革命運動の本質としてのプロレタリア権力創造に向う、労働者人民の能動的権力志向への第一歩を記したものとして評価されねばならない。つまり、戦後労働運動、学生運動が、一方における共産党の「諸要求運動」の固定化に見られる労働者を即自的・ブルジョア的意識に常に押し止められて来たことと、他方におけるそれへの即的反撃としての認識運動としてしか展開されなかつた運動に対し、ダイナミックに、階級斗争における根本問題の提起を行つていつたのである。

したがつて、その後の階級斗争はいくらかの曲折を経ながらもこの階級形成が、組織的にも運動的にも権

力を意識化し、定着させて行く方向において展開されていったのである。

その具現化が、学生革命派の統一戦線として強固に建設されていった全共斗運動にはからなかった。これら全共斗運動が各大学における個別的課題を踏えながらも、より普遍化された、全政治課題に対する政治斗争を斗い、その組織的表現として全国全共斗の結成を自ら獲得して行つた過程は、日本の階級斗争を常に先取り的に斗い抜いて来た。

学生運動が到達すべき地点としてむしろ必然のものであった。この全国全共斗の運動が、それ自身いくつかの解決しなければならない課題を持つており、一月決戦以降、その組織的問題も含めて新たな方向が提起されなければならないことはいえ、まず第一の以上のことが確認されねばならない。つまり、権力を内包した統一戦線機関が、現在の階級斗争の到達点を一月決戦という形で迎え、今日、その運動と、組織運営への飛躍を要請しているのだということを。

この全共斗運動に対する認識と、それによって表現されている階級斗争の現在的到達点を理解することなく、党派全学連への運動の解消を試みる清算主義はむしろ階級斗争の後もどりを意味するもの以外の何ものでもないのである。

しかし我々が今日この全共斗運動の飛躍を語るとき決して避け得ない

課題は、反戦青年委員会の運動の飛躍と、労働者階級総体における階級反乱の成熟がどこにまで至つてゐるのかを語らねばならない。今日の大学

斗争と、全共斗運動は、とりわけそのことを必要としているのである。大学斗争に対する多くの評価があるにしろ今日、「大学治安法」によって開始された敵階級の全共斗（革命派学生団体の総称として読め）破壊攻撃と、その象徴的攻撃内容としてのバリケード防衛が、機動隊を軸に、パリ構築と、それの永続化をほぼ完全まで不可能ならしめていくからである。我々はいま、全共斗によるバリケード防衛が、機動隊を軸に、右翼・民青・大学当局の、全共斗粉碎バリケード撤去一点にしばられた攻撃の前に耐えうることが出来ないことを素直に認めざるを得ないからである。

階級斗争の先取り的運動を強固に展開し抜いて来たが故に、敵の集中的砲火を一身に受けた学生運動は、それのみでは超えることができない地平まで達してしまつてゐる。だからこそ、いま我々の運動は、学生運動・大学斗争・全共斗運動総体を、いま一度階級斗争の全的発展の中に至つて登場しうるまでに流動化している。これら労働者群が各々の生産点で完璧に張りめぐらされた職制と、民同・社民による組合支配という現実の中に、うつ積されている不満は、これまで爆発する契機をもち得ないまま四散せざるを得なかつた。妥協を前提とした所謂「社民型労働運動」の要求決定のこむずかしさと、形態は、労働者大衆を疎遠なものにし、労働運動を少数の者による専門業にせざるを得ないという、ボツダム自

とすることである。)

## 一月決戦後の運動状況

「一月決戦は、学生運動の最後の斗争である」と叫んで来たことは、それ自体決して誤りではない。ただし、またその言葉の中に、一月決戦を媒介とした、巨大な労働者人民の決起を夢みたことは事実であつた。労働者大群の決起はまだ起つてゐない。しかし、いま労働者の中に、おいて得体の知れない流動化が起こりつつあることは確かである。完全に階級斗争の表面に登場した反戦青年の労働者の斗いと、逮捕は、社民あるいは右翼労働組合傘下の労働者にまで、彼らの階級意識を呼びさせつづつあることは確かである。そしていま、これらの労働者群が七〇年初頭の春斗を、ブル新さえもが「反帝春斗」と呼ばざるを得ないよう、新たな質を具えた斗争をもつて登場しうるまでに流動化している。

これら労働者群が各々の生産点で得してきた輝かしい地平を後もどりさせよということではない。この地平をいかに全人民のもととするのか

治会同様の形骸化を生み出した。だからこそ、これら労働運動の中にも、新たな斗争形態と新たな質をもった運動の要請とともに、その運動が、職制と化した既成組合運動のワクを打ち破るために必要となつて来ているのである。つまり組合運動が單なるブルジョア的権利の主張の手段としてではなく、ブルジョア的権利の主張から出発した運動が、敵階級との非妥協的斗争の中で、プロレタリアの普遍的連帯を創出し、それ自身を権力機構にまで高めうるような運動形態、組織形態、つまり全共斗運動を必要としているのである。

また、学生運動の中にだけ全共斗創出への過程が、ダイナミックな運動と、それに同時的に付与された民主主義の徹底性、それを支える大衆性によって保証されてきたことを見ると、それらの条件性がこれまでの労働運動の中に大きく欠けていたことをも見なければならない。しかし、一ヶ月を経る過程で創出された大衆意識の流動化は、一方において「山本ココスト主張派」の台頭とともに、多くの労働者の意識が我々の予測を遥かに超えたところで、生き生きと動き始めていることを示しているのである。

それら労働者群は今日、反戦青年委に結集する強固な政治意識をもつた青年労働者を先頭に非妥協的な斗争が展開されるならば、それらの斗いにより、共に戦列に赴こうとする

であろう。

つまり階級斗争の今日の到達点は、労働者においてこれらの運動の展開が可能なところで来ている。これらの運動の保証は、第一には政治党派の問題として提出されおり、第二には、これまでの階級斗争の地平を切り開き、いま、権力創出をも明芽的形態として学園内に創り出してきた学生運動＝全共斗運動が、その論理をいかにこれら大衆斗争（文字通りの労働者大衆）の場に導き入れ得るのかという間に答えることである。

第一の問題は、それぞれの政党派の主張を持つことにして、むしろ我々が現在設定しなければならない課題が第二のものとして確固として提起されていることを見なければならぬ。つまり、全国大学斗争の個別全共斗が全面的に労働者工作に乗り出すような運動の発展を必要と、全国大学の普遍的連帯を樂きあげていた。次に我々は、全国の労働者と、全国の職場との連帯を造りあげて行くことが七〇年代斗争の不可欠の課題とされているのである。それは単に、街頭における反戦青年委との共同斗争や、あるいは統一集会を獲ち取るようなものではない。仮にたとえば、中国の文化革命時ににおける紅衛兵が、工場を訪れ、労働者との學習会を持ち、生産活動に共に参加し、そして共に斗争を組んで行つたように、あるいは、日本においても、神田近辺の書店の争議に、共に書店占拠斗争を行い、泊り込みを行ひ、斗争資金作りのための物産店を行なつたような斗いが、組まれて行かねばならない。今日、そのような意味での運動の飛躍——より一層の深化、普遍化が追求されねばならない。そしてそれらが巨大なうねり

・沖縄を中心的政治課題として設定しながら、七〇年代階級斗争を全面的に担つていく確認がなされたとき、個別大学における全共斗組織そのものが、一月決戦を自らの運動課題として設定したように、一月決戦を経た今日、それがいま一步の飛躍を要請されており、全国全共斗連合を統一司令部的内容としながら個別全共斗が全面的に労働者工作に乗り出すような運動の発展を必要と、全国大学の普遍的連帯を樂きあげていた。

全国全共斗と、全国反戦の連帯といふ形では決してなし得ない。それは、全共斗運動と、反戦派運動が今だ質的にも、運動内容としても大きな違ひがあるのだから。むしろ現在的には、個別大学が、個別的（あるいは地域的）に行ひ一つの形式を創り出して行かねばならないものであるだろう。そして、それらの運動が、労働者全共斗連合を創りあげたとき、権力斗争の現実化が、ソヴェト運動として登場しうるのである。とりわけ今日、ソヴェト運動を階級斗争の発展段階を検証することなしに夢想する部分に対し、同時にそのことによつて、むしろ学生革命派の戦斗的隊伍と、思想を拡散させてしまふ結果になることをはつきりと指摘しておかなければならぬ。

### 明 大 に 於 る 斗 争 の 発 展

以上のこととをふまえ、我々は更に現実的課題としての明大（あるいは幾つかの大学においても適用しうるかも知れないが）における斗いの発展の方向を展望してみよう。我々は

### 学園と職場の連帯を

とりわけ全国全共斗結成が、安保

そのためにまず、全共斗はどこまで強化されたか。その反語として、大學秩序はどこまで解体されたかを問わなければならない。

すでに述べたように、全共斗運動

創造の基盤が、民主主義の徹底化と、斗争の大衆化、つまり、いくつかの課題を媒介しながら、全大衆が自らの立場と思想を、行動をもって実体化させ、政治の舞台に登場し、それらが斗争発展のための最低限綱領の確認をもつて遂行しうるものでなければならぬ。当初「大学立法」、「紛糾」をもつて開始された明大バリケード斗争は、したがって、すぐれて政治的・階級的内容を持つものであつた。またこの斗いが、いくつかの右翼的批判を受けつつも、ボツダム自治会において、ストライクを確立し得たことは、これらの運動が、大衆的高揚をもつて達成されたことを示している。そしてこの斗いの発展過程は「大学立法」の成立、施行適用、運動という状況自身の深化とともに、斗いの深化をも行つて来た。

とりわけ九・五の全国全共斗連合結成を経た後とところの、全共斗運動と、バリ・スト論争は、明大理大が一つの発展段階に至る過渡期であった。

更にそれが、一〇月非常体制の確立のため敵階級のバリ撤去の恫喝の前に、当局がもろくもくずれ去つて行つたとき、より明らかに政治課題安保・沖縄斗争を自からもの

としていたのである。

その後、一〇・四全學集会粉砕、一〇・九バリ死守戦、一〇・一〇集会へと、強固な隊列を形成すると共に、一月決戦の整備を行つて来た。

一〇・二一斗争を全共斗としての隊列を持つて斗い得なかつたことの戦術的総括は、一一・一六一七斗争において、一二〇一五〇名の全共

斗行動隊を組織することによって、一月決戦を、全共斗運動の発展階段として斗い抜いたのである。つまり我が全共斗が、現在的に位置してゐる地点は、總体としての全国全共斗運動と同等の地平を獲得していると言つて良いだらう。同時に、我々が追求した大学の秩序解体もまた、全國大学における同様の位置、学校側に対する権力からの底譲により、ロックアウト体制による授業再開が行われるに至つている。

しかし、このロック・アウト体制自体が、すでに個別大学内的には斗争を収拾することが不可能であるとの証左であり、その意味で第一に争を収拾することが不可能であることはボツダム体制を基礎とする秩序体系は我々の斗いによつて完全に打ち破られはした。しかしながら、このボツダム体制（大学の自治・学問・研究の自由論等）の破壊によつて生れた階級運動は、今日、敵階級の

な反撃を示していたのが、一変して、ブルジョア階級への柔順な下僕と化そうとしているのである。

総じて言うならば一部は革命派へ、他部分は強権的暴力支配の庇護のもとへと包摶されて行つてゐるのである。

だが、これら学生大衆は、数ヶ月の斗争において学生が提起した問題を忘れて去つてしまつてゐるのではないか、また屈辱的な現在の体制を認めてしまつてゐる所でもない。新たに回復された秩序と、日常性の中で、それら学生大衆が再びブルジョア的生活者にもどることを強制されてしまうのである。仮にいま再び具体的の斗争が開始されるならば、学生大衆は新たな非日常性を自ら受け入れるばかりか、その斗いの提起により確かな立場をもつて返答してくるであろう。その運動がいかなる形と思想内容をもつて提起されるのかが問われる。そのことはもう一度大学解体、帝國主義的教育秩序解体の意味を再検証する作業と並行されて行なわねばならない。

大学解体への志向は、個人的次元では、大学とそこにおいて獲得された來た、ある種のブルジョア的権利を放棄することであり、即ち的意識を、対目的意識にまで高めることを要求されたと同時に、總体的には、大学という高等教育機関において陶冶されるブルジョア価値概念と、ブルジョア支配体系を根底からくつが

な反撃を示していたのが、一変して、ブルジョア階級への柔順な下僕と化そうとしているのである。

総じて言うならば一部は革命派へ、他部分は強権的暴力支配の庇護のもとへと包摶されて行つてゐるのである。

だが、これら学生大衆は、数ヶ月の斗争において学生が提起した問題を忘れて去つてしまつてゐるのではないか、また屈辱的な現在の体制を認めてしまつてゐる所でもない。新たに回復された秩序と、日常性の中で、それら学生大衆が再びブルジョア的生活者にもどることを強制されてしまうのである。仮にいま再び具体的の斗争が開始されるならば、学生大衆は新たな非日常性を自ら受け入れるばかりか、その斗いの提起により確かな立場をもつて返答してくるであろう。その運動がいかなる形と思想内容をもつて提起されるのかが問われる。そのことはもう一度大学解体、帝國主義的教育秩序解体の意味を再検証する作業と並行されて行なわねばならない。

その第一の課題は、大学権力機構の解体へ向けた、教授会の階級性の暴露と、多くの犯罪に対する責任追究である。

第二は、ブルジョア的合法機關も含めた権力機關を奪取することである。

第三は、恒常的暴露・諸宣体制の確立と、中心的司令部の強化・建設である。

大学当局が、六八年と六九年の斗いの中で、あらゆる意味で大きな打撃を受けたことは確かであるし、彼らの秩序回復と、正常化が、処分等をも含む学生へのしわ寄せとなつて表われ得ないことは明白である。それらの矛盾を媒介に、攻撃的姿勢を後退させることなく、再度の斗いの爆發へと導き入れるのなら、人間解

体を意識化した斗いは、より高い次元へと発展するであろう。

更に現在の斗争委が、教対体制の確立と、それをとりまく大衆の結集を得てしているとき、それの大衆運動と、斗争を守り抜く、強固な思想性を持ち、規律性をもつた全共斗軍団の建設を必要としていることも付記しておかねばならない。

ともあれ、七〇年と七〇年代が、戦後世界体制の再編を要請されながらも、現実の後進国解放斗争の承継、發展の中に、軍事的反革命体制の強化を最前提にしなければならない階級的混乱と、社会的矛盾の拡大の中で、その組織力と、影響力を一途に拡大して来た革命派の運動——

階級のもとなりうることは充分に可能であり、多くの自然発性的暴動をはらみつつ、總体として革命を意識化するような時代として迎えることは容易である。その時代における学生革命派の位置が、これまでの個別大学を基礎とした反乱と、その結果遂に設定した街頭政治斗争のワクを超えて、全社会の権力と政治権力の奪取を目指した階級斗争総体の中、より有効的な運動を創造し、創造して行く部隊として登場してこなければいけないのである。更にそれらの運動が、革命の党と、そしてブルガリア階級の軍隊を創造し、大衆反乱を背景とした、ブルジョア権

力機構、軍事機構との総対決を準備するならば、ノ革命の七〇年代は現実のものとなるであろう。

今日、階級斗争の深化を一身に担つて来た学生革命派の運動は、その「先取り」的思想と行動を、全階級的課題としなければならないが故に、またそれを果さなければ、大学斗争の継続さえがなし得ないが故に、より階級的な團結と、人民解放軍の強固な軍団建設を今日的課題としなければならない。「一月決戦は学生運動の最後の斗争である」階級斗争におけるくり返えしも、二度目は喜劇たらざるを得ない。個別大学斗争（教育斗争）の再度の発展と、更なる深化を叫ぶことは、それのみでは階級斗争を一步後退せよと叫んでゐるにしかすぎない。革命の七〇年代、アプロレタリア権力創造の時代を、より攻撃的に斗い抜いて行こうではないか。

**日本階級斗争の前進万才／**  
プロレタリア国際主義の勝利  
万才／  
革命の七〇年代——プロレタリア権力の創造に向かって進むに及ぶ  
明大全共斗の階級的團結を強化し、プロレタリア革命の任

## 全共斗の再度の強化を

の道を選ぶほかない。左からの階級的分解促進、右からの帝国主義的再編に坑しきれない。みじめな支配者」リ大学当局、教授会の姿がここに端的にあらわれている。

われわれは、彼らを徹底的に追いつめ、階級的分解を更に促進していくであろうことをはつきりと宣言しようではないか。

大学当局は、一月東大決戦以来全ての大学がとらざるを得ない対応として加藤の近代化路線と同質のものを検討せざるをえなくなった。それが二月に発足した学長室専門委員会である。既に明治大学においては、パリケートが行なわれる前から明大的な中教審答審に沿った「大学改革」が始まっていたのである。そうであることを確認するならばわれわれの対決納は、「大学改革」に対する徹底的な暴論・情宣を行ないつつ権力と繋着しつつある大学当局の態度を徹底的に追求して行くことが必要であつたであろう。

近代化路線、個別的大においては「大学改革委員会」とは何を意味するものであろうか。東大斗争があれほど質と量を獲得しながら提起した問題は七項目要求から始まつた争が、六八年後期の段階にあつては文部省権力の側面に屈した右翼秩序派一日共・民青諸君を基盤とした加藤執行部の登場」「國大協路線」の破産をもたらし、その発展のなかで、東大斗争は権力との直接対決、帝大

解体の斗いへと深化せざるを得なくなつた。とりわけ、國大協路線が小ブル階級の権力に委託された「大学自治」であったものが、東大斗争の深化とともに近代化路線を登場させ、権力の直接支配をうたい上げた大学立法が小ブル階級の必死のあがきにもかかわらず通過していつた。そしてつまるところ彼らのとれた唯一の態度は、大学立法の実質的な適用をはかるものでしかなかつた。教授会内部の対立・分解を抑えてでも、現在の学内情況、とりわけ教授会内部の分裂は激しく、全共斗運動が小ブル階級を分解しその基盤をゆるがしたが故の当然の帰結である。自らの基盤を犯された者の反撃と動搖が、具体的には何の方策も持たずに日本共産党のように全共斗に対する中傷と暴力的対決となつてあらわれてくる。二九日の右翼大連合と有連合と日共・民青の醜い野合となつて当局の「正常化」を側面から支持する形で登場してきた。

一月決戦を斗い抜いた全共斗も確かに違つた意味でその階級的流動は激しくなつてゐる。われわれは、路線の明確化と運動実体の再構築をもつて再度集約しなければならない。今日の階級情勢は、総体として小ブル階級が分解されプロレタリアート側とブルジョアジーの側という二極に大きく分かれつある。このよう全体の情況と同様に、明治大学においても教授層・学生層の内部に分解

がおこつてゐる。このような諸君を集めするわれわれの方向性は、一定の範囲で行ないつつ現在個別に行なわれつある授業粉砕斗争、学館奪還斗争を更に強く推し進め、一月一七日の全共斗の政治集会へと集約しながらそれ以後の学校当局との団交、再封鎖、入試粉碎等々を行なつていきたい。

この再封鎖等々に関しても、六月二一日のバリケードとは意味を異にする、むしろ明治帝國主義大学解体の方向に向かうこと。一月決戦が暗示したように斗いの基軸が安保・沖縄斗争でありその階級的な視点をもつて学園斗争を規定しその方向に向かうこと。一月決戦が全共斗運動を媒介にしながら個別支配秩序解体の方向に進まなくてはならない。現時点では、不充分ではあるがこのような方向性をもつて明大斗争の更なる深化・発展を追求して行きたい。

全共斗は、一月決戦を斗いうる中で強固な統一戦線として武装しない時代においては、学生戦線における唯一の統一戦線として機能しなければならない。一般的な統一と團結を口にするのではなく、むしろ七〇年代をわれわれが統一戦線として活動する形で登場させ、その果たす役割は何かということを明確にさせることが必要であろう。

学校当局は、既に公安法官憲に約百名規模の活動家リストを渡し、そのうち五〇名程度を処分対象として検討していることが噂されている。「正常化」という波に乗つた大学立法院の実質的な適用、それを側面から援助しようとする右翼秩序派・日共・民青の反革命を弾劾し、権力と一体となつた大学当局に対する対決を強めようではないか。

この再封鎖等々に関しても、六月二一日のバリケードとは意味を異にする、むしろ明治帝國主義大学解体の方向に向かうこと。一月決戦が暗示したように斗いの基軸が安保・沖縄斗争でありその階級的な視点をもつて学園斗争を規定しその方向に向かうこと。一月決戦が全共斗運動を媒介にしながら個別支配秩序解体の方向に進まなくてはならない。現時点では、不充分ではあるがこのような方向性をもつて明大斗争の更なる深化・発展を追求して行きたい。

## 大学改革中間報告 批判の視座

明大助手共斗

全共斗は、一月決戦を斗いうる中で強固な統一戦線として武装しない時代においては、学生戦線における唯一の統一戦線として機能しなければならない。一般的な統一と團結を口にするのではなく、むしろ七〇年代をわれわれが統一戦線として活動する形で登場させ、その果たす役割は何かということを明確にさせることが必要であろう。

たとえ、國家社会であれ大学であれ、それを改革しようとする場合、何のために、どのように改革するかが問題（一般的にいって、客觀的実在としての物質そのものにおける内在的矛盾）と同時に、同時に意識（即ち、明治大学の内向的・内面的・内面的・内向的の諸問題）には

る矛盾）とされねばならない。

かかる意味において、中間報告の目的と内容が、内実としてどうなのが問われる必要がある。そこで、この間世界的に起つてゐる大学紛争

を再度問うてみると重要になつてくる。客觀的実在としての大学そ

のものにおける内実の矛盾は特にこの間に起つてゐる大学紛争

改革には大別して三様の思考軸があると考えられる。第一の思考軸は、まさに全共斗の学生諸君が提起したものである。それは、大学を社会総体において捉え、大学が内在的に包摶する矛盾は、資本主義がもたらす必然的なものであり、社会改革なくして大学が内在的にもつ矛盾の発展止揚がありえないとするものである。換言すれば、大学の権威主義（権力関係）が国家権力に結びつき、国家権力によって支えられている以上、大学は体制の一部であり、思惟的に改革されることはありえないという思考である。それに対し、第二の軸は産学・官学・軍学共同は当然で、國家の要請によって大学の内実が規定されるべきであるという立場であり、現体制の延命を目的意識的に志向する思考軸である。この思考軸に添つて大学の営為が再び日常化されようとしているのが日大をはじめとするフッシュ大学である。そして、第一・第二軸に対比し、ある幻想のもとに、まことしやかに提起されているのが第三の思考軸であり、これは東大を頭にした自主改革路線（近代合理主義を基調とする）である。形の上では第二の軸を全面的に否定しつつも、内実、第一軸を否定し第二軸に收斂する思考軸である。体制の如何、イデオロギーの如何を問わず、大學は世の如何を問わず、学問・研究の政治的中立性と自律性を保障され

たものとして、自目的的に改革されるべきだという思考軸である。この改革への思考軸こそ大学改革中間報告軸に他ならない。この目的Ⅱ軸によって内容が規定されることによって、社会總体における改革がどの軸に属するかということを目的意識的に追求することによって、社会總体における大学改革の現在的位相が明確になるとともに、この間全共斗によつて創出された斗争の位相との関連が明らかになつてくる。

### 改革の契機と改革案

運動の存否に拘わらず、既述したように、改革の目的Ⅰ思考軸は三様に大別できよう。しかし、どの目的Ⅱ思考軸を採用するかということは、改革の契機（媒介する運動の質）を抜きに考えられるものではない。したがつて、この間の全共斗運動が媒介して改革案が用意されているといふ客観的事実関係がある以上、全共斗運動の質（提起した問題）がどのように改革案に生かされているかと、いう視点での批判が極めて重要なにつくる。中間報告を見る限りでは、全共斗運動が撲起した主張が正面面から反論するという立場（体制内改革）が貫かれていることを認めざるを得ない。換言すれば、改革案の立案は、物理的な意味で全共斗運動を契機としつつも、質的意味では契機

としないばかりかそこからは何も渡りあげていない。そればかりではなく全共斗が提起した主張に反して、その運動から『大学を守る』といふ立場に立脚している。若し、大学改革案を作成するに至つた過程で改革の契機があつたとすれば、それは、まさしく内実として『大学法』『中教審答申』であったと云うべきであろう。改革案を通して流れている思想は、中教審答申（当面する大学教育の課題に対応するための方策）の思想に酷似している。唯一対立的見解をとっているのは、『教員人事問題』に関するものだけであるのは單なる偶然だろうか。このことは、明大教職員組合の『民主的改革の基本方向』についても等しく指摘できるところである。このことをもつてしても、今回の大学改革の契機となつてるのは、運動主体の全共斗の提起した主張ではなく、中教審答申を支柱とする大学法であることが明確である。したがつて改革への契機がそうである以上、アカデミック・フリーダムと云つても大学における権力構造を支えている教授の特權的権力の擁護が守られる限り、大学の管理運営の近代的合理化は、企業における『合理化』と何等異なるものはない、この大学の近代的合理化こそ、全共斗運動によつて破壊され、外的に批判されたということを忘なければならぬ。したがつて、また思惟的にはどうであれ、客観的に

幻想としての大学像が前提既述したように、体制の如何を問はず、大学は学問研究の場として『普遍的共同社会』であるべきだとする第三軸の改革思考の前提はどのような誤謬によつてもたらされるかを問うてみたい。それは、学問研究の規定にその誤りの要因を求めることができる。現体制内において、人民大衆が屈辱的生活を甘受している状況で大学のみが治外法権的特權を有することは幻想であるし、体制内の学問そのものが、現実から隔離されたところの特殊実体としてしか存在していない。この学問に普遍的学問の規定を与えるところに疑似普遍性の大衆像の幻想が浮かびあがるのである。

は国家を否定し、現体制を否定する全共斗運動の主張に反対する立場に立たざるを得ないことになる。中間報告の『改革の必要性』の内容は、斯様な意味で、全く現時点で何故改革が必要となつたのかという大学の内在的矛盾と大学紛争との関係を明らかにしえないので、展開されている中間報告の内容は推して知るべし、と云えよう。

にして改革は語り得ない。しかしながら、改革案の文脈を支える思考に、「大学の自治・学問研究の自由」が過去既に存在して、その自治と自由を破壊した者こそ全共斗に代表される一部暴力学生だという視点が潜んでいることを指摘したい。一体、大学において「学問研究の自由」「自治」があったのだろうか。あったと思つてきた「自由」や「自治」こそまさに幻想でしかなかつたことをケバールを以つて明らかにしたのがこの間の斗争ではなかつたのだろうか。思惟的にはどうであれ、客観的実在としての大学は、体制の一部である以上、大学のみが唯一治外法権的個有の特権を持つことは不可能であるし、持てるものではない（学問の内実からいって）。したがつて体制内にある大学における日常的營為としての学問研究も体制の補完物であることから免がれることはないであろう。万が一にも、補完物的役割を返上して、普遍的学問研究を保障しようと思えば、大学総体が反・大学・批判・大学として存在する以外はない。しかし、この主張は全共斗がこの間の斗争の過程で明らかにしたものであり、大学改革思考の第一軸であり、第三軸の思考延長では導き出せない地平であることも明らかである。

大学における権力的支配構造を、階級的支配関係が無媒介的に形成するものとは考へないが、複雑な媒介環によって形成されることは疑う余地がない。教育研究の場における権力的支配は教える者（管理者）・教えられる者（被管理者）との間の不均等な諸関係から発生するものであり、教育の実践を通して絶えず再生産されるものである。しかし、中間報告の文脈から斯様な視点において熟考した痕跡が読みとれるだろうか。しかも、大状況としての社会總体における階級的支配関係に規定されて存在する小状況としての大学における権力的支配関係は、個別大学の制度の改善と合理化によつてもたらされるわけがない。しかも、個別大学における権力的支配の歴止めに於てさえ、何等具体的に改革案は触れていないことを見抜かねばならない。

大学における学生の地位が、何故この間の運動を媒介にして組上のにぼらねばならないのだろう。改革案や中教審答申の中で学生の地位を問題にせざるを得なかつた理由は明らかである。それは、まさに管理者的発想であり治安的発想であると云つて過言でない。

『学内学生団体と学生自治会』『政治活動と学園の秩序維持』『学生に対する処分制度』『学生参加の意義』『学生参加の領域と限界』『学生参加の形態と条件』……この項目は中教審第二四特別委・中間報告（草案）の項目である。『学生の地位の問題点』『権利主体としての学生』『大学構成員としての学生』『大学の管理運営と学生』『学生参加の考え方』『学生参加の内容』『处分制度』……これは明大改革案の項目である。この兩改革案に共通して流れに代表される國家独占が期待するところの『権力的関係と階級的支配と』の一層の効率化と合理化にあると云わねばならない。教授と学生、教授と助手との教育的・研究的関係が権力的關係に転化するのを極めず防

止する装置が用意されねばならないが、社会構造の矛盾を放置した状況で個別大学における『この装置』の設定が可能かどうかについては疑義の残るところである。

## 大学における学生の地位

大学における学生の地位が、何故この間の運動を媒介にして組上のにぼらねばならないのだろう。改革案や中教審答申の中で学生の地位を問題にせざるを得なかつた理由は明らかである。それは、まさに管理者的発想であり治安的発想であると云つて過言でない。

『学内学生団体と学生自治会』『政治活動と学園の秩序維持』『学生に対する処分制度』『学生参加の意義』『学生参加の領域と限界』『学生参加の形態と条件』……この項目は中教審第二四特別委・中間報告（草案）の項目である。『学生の地位の問題点』『権利主体としての学生』『大学構成員としての学生』『大学の管理運営と学生』『学生参加の考え方』『学生参加の内容』『处分制度』……これは明大改革案の項目である。この兩改革案に共通して流れに代表される國家独占が期待するところの『権力的関係と階級的支配と』の一層の効率化と合理化にあると云わねばならない。教授と学生、教授と助手との教育的・研究的関係が権力的關係に転化するのを極めず防

## 管理運営の近代的 合理化と大学改革

管理運営は人間が營為するものであり、制度は人間によつて運営されるものである。しかるに、現在まで、やれば出来たものさえ、やられずに放置されてきたことの原因を根柢的に追求せずして制度を改めて見ても全く何の変化も期待できない。それを承知（改革案はそれを認めている）で、改革の支柱を管理運営の近代的合理化に求めていることは、他ならぬ現在の大学を無批判的に前提とし、管理機構の中に組して管理しよ

うとする資本家的発想であり、大学は、内々よしの学問研究

よつて規定されて、かくあるべし、となつたところから大学の管理運営が実質的に、しかも総体的に問われるべきであつて、それを問うことなくして、総長がどうの、学長がどうの、評議員会がどうの、と云つて見ても相對的合理化はなしえても、大学総体の抜本的改革はなしえないのである。學問研究・教育の必然的な要請として学長や総長や評議員会が存在するのだろうか。この悪しき管理制度の伝統を疑うことをせず、運営や管理のみを手直しすれば何とかなるという姿勢は改革の質をもつものではなく、『企業的合理化』でしかなく、改革の架構を創生した全共斗を中心とする斗争学生諸君の主張と根本的に相違するものである。そればかりか、自主改革の思考軸こそ全共斗の運動压殺の思想に通じるものとさえ云えよう。

### 学部・学科制の無批判的踏襲

既述したように、総の関係だけではなく、横の関係においても大学の頹廃（学問相互間の無批判とセクシヨナリズムの相克）がもたらされている。斯様に指摘しつつも、地理的条件をはじめ『学部制にも悪いことばかりでなく、長所もある』といふ論旨で現状が肯定されている。長短あいまつて、客観的に実在している大学で、現実にその短所が頭在化してきたころに問題の所在があるので

あって、この項で掲げられている学部の長所は、直接学部がもたらした長所とは規定できない。ましてや、地区が和泉・生田・本校に分離しているから、学部統合が不可能だと云うに至つては、改革の改革たる意義は前提の段階で否定されないと云はねばならない。工学部が生田に移つてから五年有余である。この移転計画が審議された段階においてさえわが国のみならず諸外国で学部・学科の再編成が進められ発表された。にも関わらず、その段階において充分なる検討のないまま経営的側面と、学部セクシヨナリズムによつてイージイに生田に工学部を移転せしめておいて、地区が三地区に分離しているから、現実的に不可能だと云うに至つては改革は放棄されたに等しい。この点からみても、教授・教授会は被害者ではなく、加害者として存在したこと自身否定すべきである。しかも、学部・学科の存廃を検討する上で不可欠の研究・教育総体の原理論的追求を回避して素町人の・俗物的発想をもつて学部・学科に論及するに及んでは批判の対象にさえなりえない。斯様な改革案を作成せしめた背景には、現存する学部セクシヨナリズムの壁の厚さが無言の圧力となつて各委員に働いていたことを見逃がしてはならない。この学部セクシヨナリズムさえ止揚できえない存在である委員が、『学生の処分』を語るに至つては落である

う。どうして、改革のための案ならば、現実の内在的矛盾を直視して、徒らに現実性を主張せずラジカルに改革の主張をしないのであろうか。この壁こそ、擬制としての大学の疑似普遍的学問の結果に他ならないことを指摘しておかねばならない。

### まとめて粉碎の対象

改革の目的、その内容、改革の契機についても不明であり、論議以前の段階でこの改革案は粉碎されなければならない。商論としては、『中教審の答申』の方が第三軸として論理が貫徹しており、明大改革案は論旨においても貫性がなく、公にするには憚られる代物である。余りにもミジメな改革案であり、他大学の改革案ぐらい参考にして、基案ぐらいはラジカルに展開して欲しかった。

しかし、この相談は出来ない相談である。この間の斗争に、常に傍観者を装いつつ、盲憲と癡着した日常性を送った者達にはどの道大学改革を語る素養も資格もある訳がない。項目別にも批判の視座を展開しようと思いつぶを執つたが、批判の対象にもありえないでのベンを置く。近代合理主義以前の代物で、文部省からもその『不出来』のお叱りを受けよう。もう少し勉強して貰いたい。まとめて粉碎する以外に術なしとする。

12. 19 日時 十二月十九日午前一〇時  
場所 慶應大學三田校舎

12. 17 日時 十二月十七日午後一時  
場所 明大和泉校舎六番教室

## 全明政治集会

基調報告・講演（折原 浩、

三里塚（代表）決意表明

○ 安保粉碎・沖縄斗争勝利  
○ ロックアウト粉碎・授業再開阻止  
○ 全ての「正常化」策動粉碎  
○ 大学改革委員会II「中間答申案」粉碎  
○ 十二・十七全明政治集会に結集せよ！  
○ 十二・十九全国全共斗連合第  
二回大会に結集せよ！

### スローガン

- 安保粉碎・沖縄斗争勝利
- ロックアウト粉碎・授業再開阻止
- 全ての「正常化」策動粉碎
- 大学改革委員会II「中間答申案」粉碎
- 十二・十七全明政治集会に結集せよ！
- 十二・十九全国全共斗連合第  
二回大会に結集せよ！